

42340

教科書文庫

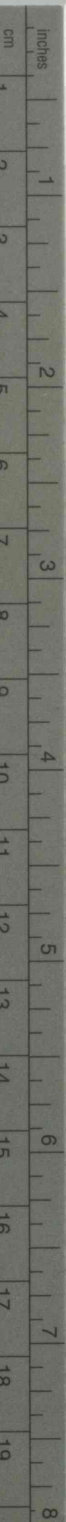
4
8/5
42-1937
2000.0 22308

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

教科書文庫
4
815
42-1937
2000022308

女子新國文典

初年級用



濟定檢省部文
科語國校學女等高 日二月一十年二十和昭

教科書文庫
4
815
42-1937
2000022308

資料室

375.9
Hi18

女子新國文典

廣島高等師範學校
附屬中學校
國語傳文研究會著

初年級用



広島大学図書
2000022308





例
言

- 一 本書は昭和十二年三月改正の要目により、口語法の大要を知らしめるため、女學校第一學年用文法教科書として編纂したものである。
- 一 常に小學校との連絡によつて、標準語法の修得を確實ならしめることに努めたいのが念願であるから、本書はすべてその語法を現行の尋常小學校用國語讀本中に求めた。
- 一 理論よりも實際を重んずるが故に、例文によつて歸納的に了解しうるやうに努め、説明は出来る限り簡單にし、規範的なものの正確な知識を得させることを第一とした。
- 一 練習の問題は、一は平易を旨とするため、一は既習の文中に法則發見の興味を起させるためを思ひ、殆ど全部尋常小學校用

國語讀本中から採つた上、大部分單語にわけておいた。尙、別に自修題を添へ、餘裕ある場合の練習に使した。

一 品詞はその概念を與へた後、主要な品詞の詳説に及ぶのが自然であるから、今はそれによつた。従つて、中には再び説かない品詞もあるから、さういふものに對しては、最初に念を入れて修得せしめられたい。

一 文章篇に於ては、文の構造の大すぢに注意させる程度にとゞめたいと思ふが故に、極めて簡単に説き、文及び節の種類等は之を第二、三學年用に譲ることにした。

昭和十二年五月

著者識

女子新國文典 初年級用

目次

總説	一
第一篇 單語篇(上)	二
第一章 名詞	二
第二章 代名詞	五
第三章 動詞	九
第四章 形容詞	二一
第五章 形容動詞	二三
第六章 助動詞	二四
第七章 助詞	二七

第八章 副詞……………一九

第九章 接續詞……………三三

第一〇章 感動詞……………四四

第二篇 單語篇(下)……………六六

第一章 口語動詞の活用形……………六六

第二章 口語動詞の活用の種類……………三三

一 四段活用……………三三

二 上一段活用……………三三

三 下一段活用……………三三

四 カ行變格活用……………三三

五 サ行變格活用……………三四

第三章 口語動詞の識別法……………三六

一 活用の種類を識別する法……………三六

第四章 活用 of 假名遣を識別する法……………三七

第四章 口語形容詞の活用……………四四

第五章 口語形容詞の活用……………四四

第六章 口語用言の音便……………四九

一 動詞の音便……………四九

二 形容詞の音便……………五五

第七章 口語助動詞の種類及び活用……………五五

一 受身の助動詞……………五五

二 可能の助動詞……………五五

三 使役の助動詞……………五五

四 崇敬の助動詞……………五五

五 打消の助動詞……………五五

六 時の助動詞……………五五

七 願望の助動詞……………五五

第八章

口語助動詞の接續

他の品詞と助動詞との接續

- 一 受身(可能・崇敬)の助動詞 五
- 二 可能の助動詞 六
- 三 使役の助動詞 六
- 四 崇敬の助動詞 七
- 五 打消の助動詞 七
- 六 時の助動詞 七
- 七 願望の助動詞 六
- 八 推量の助動詞 六
- 九 指定の助動詞 六

- 一〇 比況の助動詞 七

助動詞相互の接續 七

第九章 口語助詞の種類及び用法 七

- 一 第一類 七
- がのにへをとよりからまで 七
- 二 第二類 七
- ばのでからてもけれど(も)がのに 七
- してたりながら 七
- 三 第三類 七
- はもこそさへでもばかりだけ 七
- しか・ほかきり・きりくらゐ・ぐらゐ 六
- やらかやな・なあよぞね・ねえ 六

第一〇章 口語の接頭語・接尾語 三



口語文
語語文

總

說

右の例のやうに、わが國語には口語と文語とあるが、その何れでも、一つのまとまつた考をあらはしてゐるものを文といふ。文は、これを分解すると、右の傍線を施した部分のやうに、それぞれ一つの意味又は働をもつたことばに分れる。その一つのことばを單語又は語といふ。

總 說

櫻の花が美しく咲きました。

櫻の花美しく咲けり。

女子新國文典 初年級用

目

次

六

第三篇 文章篇……………全

第一章 文の成分……………全

第二章 文の成分の位置及び省略……………全

自修題補遺……………全

目次終

- 口語動詞活用表
- 口語形容詞活用表
- 口語形容動詞活用表
- 口語動詞活用識別表
- 口語動詞假名遣識別表
- 口語用言音便表
- 口語助動詞の種類活用及び接續表

品連
詞語

櫻の花咲きました。咲けりのやうに、いくつかの單語が集つて一つの意味をなしてゐるものを連語といふ。單語をその意味・働・形等の上から次の十種に分け、その各を品詞といふ。

名詞 代名詞 動詞 形容詞 形容動詞 助動詞
助詞 副詞 接續詞 感動詞

第一篇 單語篇(上)

第一章 名詞

- 一 妹の名は花子です。
- 二 東京は日本の首府であります。

名詞

數詞

三 白や紫の花が道の右にも左にも咲いてゐる。右の例の傍線を施した語のやうに、事物の名稱をいふ語を名詞といふ。

名詞の中、次の例のやうに、事物の數量又は順序をあらはす語は、特に數詞と呼ぶ。

- 一 二と三とかけると六になります。
- 二 鉛筆一ダースの價が三十錢だ。
- 三 右から二番目が弟です。

練習題

次の文中から名詞を選び出し、數詞は特に指摘せよ。

(1) 麓の川を白帆が三つ四つ通つてゆく。

- (2) 怒と失望と後悔とに身も魂もくだけ果てた。
- (3) 日本では明治の初まで太陰暦を用ひてゐた。
- (4) 時計を見つめてゐると、八分九分十分いたづらに時間が長いやうな氣がする。
- (5) おとうさん○二百十日は立春から二百十日目に當るのですね。
- (6) 父はダーウインを醫者にしようと思つた。
- (7) 第五のトンネルこそ長さ九千七百二米の清水トンネルである。
- (8) 夜の明けぬ中から北の方で銃聲が聞えました。
- (9) 宣長は眞淵の志をうけつぎ三十五年の間努力を續けて遂に古事記の研究を大成した。
- (10) 春の少し暖い晩くくく蛙の鳴く聲がする。

第二章 代名詞

代名詞
 人代名詞
 指示代名詞

右の例の傍線を施した語のやうに、事物の名目の代りに用ひてこれを指示する語を**代名詞**といふ。
 代名詞の中、人の名の代りに使つてそれを指示するものを**人代名詞**といひ、事物場所方向を指示するものを**指示代名詞**といふ。
人代名詞の主なもの

わたくし わたし わし 僕 (われ)

あなた そなた お前 君 (汝)

このかた そのかた あのかた これ それ

あれ (彼)

どのかた どなた だれ

指示代名詞の主なもの

これ それ あれ どれ なに

こゝ そこ あそこ どこ

こゝら そこら あそこら どころ

こつち そつち あつち どつち

こちら そちら あちら どちら

この・その・あの・どの・わが等は、本来代名詞「こ・そ・あ・ど・わ」に助詞の「が」が添うたものであるが、一代名詞として取扱ふ。

體言

名詞・代名詞を體言といふ。

又人代名詞の我(吾)・汝(彼)等は普通の會話では用ひない。

練習題

一次の文中から代名詞を選び出し、其の種類をいへ。

- (1) わたしのお人形さんをこゝへ入れてやりたいな。
- (2) どれを見ても枝といふ枝にはもう黄金色の實がなつてゐる。
- (3) あちらこちらの村々から細い煙が立上つてゐる。
- (4) どの山を見てもどの谷を見ても、蜜柑の木だ。
- (5) 此處は何處だらう。一體わしはどうしてゐたのだらう。

- (6) あゝ、あれは僕の作った曲だ。君、聴き給へ。
- (7) 潮が引いて、もうそこそこ、に洲が見え出した。
- (8) 蟲がそつちにもこつちにも節面白く鳴いてゐる。
- (9) どうしてあの青年をお用ひになりましたか。
- (10) それは私にお尋ねなくとも、そこに槍の名人が居ります。あれにお尋ねなさいませ。
- (11) 子供はそこらを見廻してゐるが、やがて仕事臺の上の物をあれこれといぢり始めた。

二、右のほか、人代名詞を知つてゐるだけ挙げよ。

第三章 動詞

動詞

- 一 櫻の花は、一時に咲き、一時に散る。
- 二 草を刈る、木を切る、土を運ぶなど一心不亂に働く。
- 三 明日は行きたいと思ひます。

右の例の傍線を施した語のやうに、事物の動作をあらはす語を動詞といふ。

- 一 その箱の中に手紙がある。
- 二 寺の屋根に鳩がゐる。
- 三 弟は家にをる。

右のある、ゐる、をるは事物の存在をあらはす語であるが、これも動詞である。

練習題

次の文中から動詞を選び出せ。

- (1) 村の西にくぬぎ林がある。
- (2) 雪子さんや妹は、大きわぎをして居ます。
- (3) ごろくと音を立って、数臺の戦車が來ました。
- (4) 風が吹く、蝶々のやうに花が舞ふ。
- (5) ステッキを振りく、出勤を急ぐ人たちが通る。
- (6) 預けたお金はいつでも返してもらへますか。
- (7) 何處からかほがらかなひよどりの聲が聞える。
- (8) 障子をあけて見ると、まだ雨が降つてをる。

第四章 形容詞

形容詞

一 富士山は高い。
 二 鶯は形はみにくいが、聲は美しい。
 三 樂しい旅を終へて、なつかしいわが家に歸りました。

右の例の傍線を施した語は、事物の性質又は状態をあらはしてゐる。事物の性質又は状態をあらはす語は他にもあるが、其中で、いひ切る場合に必ずいとなるものを形容詞といふ。

練習題

次の文中から形容詞を選び出せ。

- (1) 乃木大將は一生の間、寒いとも暑いとも言は

なかつた。

(2) 悔しいのか、嬉しいのか、悲しいのか、恥づかしいのか。

(3) 赤い花が一面に咲いて誠に美しい。

(4) 兵隊さんから新しい兵器についておもしろいお話を聞きました。

(5) ぼうやは好い子だねんねしなの歌を聞きながら

快い夢路に入つた。幼い時を思ひ出します。

(6) 薄暗い小路を通り、小さいみすぼらしい家の前まで来ると、中からピアノの音が聞える。

(7) 味方の勝利はおぼつかない。

第五章 形容動詞

一 昨日は暖かつた。

二 波は静かだ。

三 のどかな日でした。

右の例の傍線を施した語のやうに、意味は形容詞に似て、その形の著しく變つてゐるものを形容動詞といふ。

動詞・形容詞・形容動詞を用言といふ。

練習題

次の文中から形容動詞を選び出せ。

(1) 昨日の遠足は面白かつた。

(2) ふと目をさました時はもう遅かつた。

(3) ベートーベンはドイツの有名な音楽家です。

(4) 海の中は中々きれいだ。

形容動詞
用言

第六章 助動詞

- 一 改めようと思へば改められる。
- 二 人々の顔も見えなくなつた。

助動詞

右の例の傍線を施した語のやうに、動詞に添うて其の意義を助け、色々な意味をあらはす語を助動詞といふ。

助動詞は主として動詞に添うて其の意義を助けるものであるが、又次の例のやうに他の品詞に添ふこともある。

名詞・代名詞に添ふ場合

- 一 それが女子としての本分だ。
- 二 それを棄てたのは私です。

形容詞に添ふ場合

- 一 父の病氣は餘程悪いらしい。
- 二 随分高いですよ。

形容動詞に添ふ場合

- 一 もう遅からう。
- 二 海は静かだつた。

助詞に添ふ場合

- 一 雪のやうだ。
- 二 もうこれだけです。

他の助動詞に添ふ場合

- 一 多分明日は発表せられよう。
- 二 始めて東京に行きました。

かやうに、助動詞は、動詞・名詞・代名詞・形容詞・形容動詞・助詞又は他

の助動詞に添うて、その意義を助けるものである。

練習題

次の文中から助動詞を選び出せ。

- (1) 下駄の音が聞える、弟が歸つたらしい。
- (2) 約束は守らねばならぬ。
- (3) 雨は降るだらう、しかし風は吹くまい。
- (4) 整頓といふことはむだをなくすることだ。
- (5) 主人にほめられました。
- (6) 先生に連れられて、大演習の拜観に出かけました。
- (7) 丸いお月様が盆のやうだ。
- (8) つばめは毎年同じ巢へもどつて來るといふことです。

第七章 助詞

- 一 男も女もはだして濱へ下りて行きます。
 - 二 期限までに**出せば**よいが、萬一後れると無効になる。
 - 三 雨が激しいのに、風さへ加つて來ました。
 - 四 あなたは中々えらいですね。
- 右の例の傍線を施した語のやうに、種々の語に添うて他の語との關係をあらはし、又は或意味を添へる語を助詞といふ。

練習題

次の文中から助動詞を選び出せ。

- (1) 嬉しいにつけ、悲しいにつけて、思ひ出すのは親の

- ことだ。
- (2) 私はまだ外國へ行く船の出るのを見たことがありません。
- (3) ふと目を覺すと、遠くで犬の鳴く聲がする。
- (4) 春子あれが日本丸だよ。ずるぶん大きいね。
- (5) 汽車は密林の間を通り抜けて、やがてトンネルにはいる。
- (6) 「道子はほんたうに山羊が好きだね。」といふおとうさんのお聲がした。
- (7) 國語を忘れた國民は、國民でないと言へば、いはれてゐる。

副詞

第八章 副詞

- 一 河がゆる／＼流れる。
- 二 道は大へん險しい。
- 三 今年はやほど暖だ。
- 右の例のゆる／＼は流れるといふ動詞の意味を修飾し、大へんは、險しいといふ形容詞の意味を修飾し、よほどは暖だといふ形容動詞の意味を修飾してゐる。かやうな語を副詞といふ。
- 一 彼はやゝ暫く考へてゐました。
- 二 もつとはつきり答へて下さい。
- 右の例のやうに、副詞は他の副詞の意味を修飾することもある。
- 一 ぼんやり島が見える。

二月が明かるくて、まるで晝のやうです。
右の例のやうに、副詞は其の下の文又は連語を修飾することもある。

- 一 僅か五分のちがひでした。
- 二 直ぐ隣が私の家です。

右の例のやうに、副詞は稀には名詞を修飾することもある。
かやうに副詞は、動詞・形容詞・形容動詞他の副詞・文又は連語の意味を修飾し、時に名詞をも修飾するものである。

練習題

一次の文中から副詞を選び出し、その修飾してゐる語を示せ。

- (1) 夜はほのくと(明けそめました)。
- (2) 道ばたの枯れた草むらの底からかすかな、ごく(かす

かな) 蟲の聲がする。

- (3) 雨戸を繰ると、夜風がさつと(吹込んで) 燈火が
ちら／＼(なびいた)。

- (4) 水はとても(冷たくて) まるで(氷のやうであつた)。

- (5) 南をさして飛んでゐた鳩は、ふと(たかの一群を
見た)ので、すぐ(低空に移つた)。

- (6) 母はもう(此の世の人ではない)のかと、がっかり
しました。

- (7) 大阪驛から(ほゞ) (南)へ進むと、やがて(中之島)へ來
ます。

二次の副詞を使つて短文を各一つづつ作れ。

誠に せつせと よもや めつたに 大へん 恐らく

第九章 接 續 詞

- 一 石炭・石油及び瓦斯は、現代の主な燃料である。
- 二 お友達は登山しました。然し私は行きませんでした。
- 三 字もお上手ですし、又繪もお上手です。

接 續 詞

右の例の傍線を施した語のやうに、その前後の語連語又は文を接續する語を接續詞といふ。

練習題

一、次の文中から接續詞を選び出せ。

- (1) 氣候もよい。それに交通も便利です。
- (2) 兄は昨日出發した。だらうか、それとも延期した

だらうか。

- (3) 古い言葉を調べるのに一番よいのは萬葉集です。そこで先づ順序として、萬葉集の研究を始めました。
- (4) 救ひのボートは下された。しかしとても間に合ふまい。
- (5) 子供がつばめをつかまへました。すると其の右足に文字を記した金屬の板が附いておりました。
- (6) まあ、よく見えるね。でも、すっかりさかさまぢやないの。
- (7) あの人は非常な機械好きで、しかも愛國心の深い方でした。

二、次の接續詞を使って短文を作れ。

- ですから 或は けれども ところが
- 次に もつとも さうして

第十章 感動詞

- 一 あゝ、うれしいことだ。
- 二 おやく、これはめづらしいこと。
- 三 おい、秋子は居ないか。
- 四 はい、承知いたしました。

感動詞

右の例の傍線を施した語のやうに、感動した場合に覺えず發する語や、呼びかけ・應答の語を感動詞といふ。

注意 「あゝ困つたね」「まあ、不思議なことだなあ。」のあゝ、まあは感動詞であるが、ね、なあ等は感動の意をあらはす助詞である。即ち感動詞は獨立した發聲の語だけをいふのである。

練習題

次の文中から感動詞を選び出せ。

- (1) 「時子さん 花です、来てごらん。」「まあきれいなね。」
- (2) こら、どうした。命が惜しくなつたか。
- (3) あゝ、あなたはベイトーベン先生ですか。
- (4) はゝあ、こんなことをして、だましうちにしようとするのか。
- (5) 「やあ、すっかり變つた。」と聲をあげると、兄は「うん、これが四十日間の汗のたまものさ。」といつた。
- (6) 「失禮ながらお名前を聞かせて頂きたい。」「いや、名前を申し上げる程の者ではございません。」
- (7) ほう、この繪はうまく出來た。

第二篇單語篇(下)

第一章 口語動詞の活用形

書^か

か……ない(ぬ)う
 き……始める ます
 く……こと 人
 け……ば
 け

起^お

き……ない(ぬ)よう
 き……出る ます
 きる
 きる……こと 人
 きれ……ば
 (きよ)きろ

(來)

こ……ない(ぬ)よう
 き……始める ます
 くる
 くる……こと 人
 くれ……ば
 こい

棄^す

て……ない(ぬ)よう
 て……やすい ます
 てる
 てる……こと 人
 てれ……ば
 (てよ)てろ

(爲)

し……ない(ぬ)よう
 し……終る ます
 する
 する……こと 人
 すれ……ば
 (せよ)しろ

右の例のやうにして、すべての動詞をしらべると、

一 大部分の動詞には、變化する部分と變化しない部分とがある。

二 動詞が變化する場合には、その中に必ず五十音圖の同行の音を含んでゐる。

三 動詞は使ひ方によつて六つの形に變化する。

といふことがわかる。

かやうに動詞の形の變化することを活用といひ、變化しない部分を語幹、變化する部分を語尾といひ、活用の六つの形を活用形といふ。

第一形 主として助動詞ないぬ、う又はよう等に續けて、動作が未だ然らなつてゐない意をあらはす形であるから未然形と

活語語活
用
形尾幹用

未
然
形

いふ。

第二形 主として用言に連なる形であるから連用形といふ。

この形は助動詞ます等にも連なる。

遊 光 願

右の例のやうに、連用形は轉じて名詞にもなる形である。

第三形 主として文意を終止する爲に使はれる形であるから

終止形といふ。

第四形 主として體言に連なる形であるから連體形といふ。

第五形 助詞ばに續けて、假定の意をあらはす形であるから假

定形といふ。

第六形 専ら命令の意をあらはす爲に使はれる形であるから

命令形といふ。

連
用
形

終
止
形

連
體
形

假
定
形

命
令
形

練習題

次の語を活用させよ。

叫ぶ 閉ぢる 釣る 見る 着る 恥ぢる 流れる 煮る
 有る 来る 来る 爲る 積む 死ぬ 報いる 用ひる 居る
 蹴る 泳ぐ 植える 射る 下りる 混ぜる 堪へる 撫でる

自修題

次の文中から動詞を選び出し、それを活用させよ。

- (1) 月の光にすかして、あちらこちら探しますと、松林の中に石の牢がありました。
- (2) 外たうを着て居る者は一人もありませんでした。
- (3) 船が岸壁に近づくと、そこには、もうぎつしりと出迎の人々がつかけてゐる。
- (4) 汽車は動き出した。山を分け川を傳ひながら上ると、残雪がだんだん深くなる。

四段活用

一 四段活用

第二章 口語動詞の活用の種類

語	語幹	語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
書く	か	か	か	き	く	く	け	け
死ぬ	し	し	な	に	ぬ	ぬ	ね	ね
有る	あ	あ	ら	り	る	る	れ	れ

右の例のやうに、五十音圖の **アイウエ** の四段に活用するものを四段活用といふ。

四段活用の動詞は、五十音圖の **カ(ガ)サ(タ)ナ(ハ)マ(ラ)** の各行にある。

上一段活用

二 上一段活用

起きる	射る	語
お	(い)	語幹/語尾
き	い	未然
き	い	連用
きる	いる	終止
きる	いる	連體
きれ	いれ	假定
きよ	いよ	命令

右の例のやうに、五十音圖のイの段の音と、それに終止形連體形に、假定形にれ、命令形によ又はろが添うたものとして活用してゐるものを上一段活用といふ。

上一段活用の動詞は五十音圖のアカ(ガ)・サタ(ダ)・ナハ(バ)・マヤ・ラウの各行にある。

射るのやうに、動詞の中には、語幹と語尾との區別のつかぬものがある。表の中(一)を附したものはそれである。

下一段活用

三 下一段活用

棄てる	得	語
す	(う)	語幹/語尾
て	え	未然
て	え	連用
てる	える	終止
てる	える	連體
てれ	えれ	假定
てよ	えよ	命令

右の例のやうに、五十音圖のエの段の音と、それに終止形連體形に、假定形にれ、命令形によ又はろが添うたものとして、活用してゐるものを下一段活用といふ。

下一段活用の動詞は五十音圖の各行及びガサダバの各行にある。

蹴るといふ動詞は、元來下一段活用であつたが、今は蹴飛ばす蹴倒す蹴る等の使ひ方の外、四段活用に屬してゐる。

以上三種の活用を正格活用といふ。

正格活用
カ行變格活用

四 カ行變格活用

來 ^ク	語
る	語幹/語尾
(^ク)	未然
こ	連用
き	終止
くる	連體
くる	假定
くれ	命令
こい	

來るといふ動詞は、右のやうに、五十音圖のイ・ウ・オの三段の音と、それに終止形・連體形に、假定形にれ・命令形にいの添うたものとて活用してゐる。この活用をカ行變格活用(略してカ變)といふ。

カ變の動詞は來るといふ一語だけである。

サ行變格活用

五 サ行變格活用

爲	語
る	語幹/語尾
(^ス)	未然
し	連用
し	終止
する	連體
する	假定
すれ	命令
しよ	
せよ	
しろ	

爲るといふ動詞は、右のやうに、五十音圖のイ・ウ・エの三段の音と、それに終止形・連體形に、假定形にれ・命令形によ・又はろの添うたものとて活用してゐる。この活用をサ行變格活用(略してサ變)といふ。

サ變の動詞は元來するといふ一語だけであるが、他の語にするが添うて、多くのサ變の動詞が出来る。例へば

- 勉強する 發明する 罰する 達する
- 報ずる 論ずる 旅する 話する
- 全うする 辱うする 重んずる 輕んずる
- スケッチする コーチする

變格活用

以上二種の活用を變格活用といふ。
口語動詞の活用には以上の五種がある。

第三章 口語動詞の識別法

一 活用の種類を識別する法

語数が少くて暗記するとよいもの。

カ 變 くる(來)

サ 變 する(爲) 他語にするの添うたもの。

右の外は

四 段 打消のない又はぬが五十音圖のアの段の音に添ふ。

讀ま……ない(ぬ)。

上一段 打消のない又はぬが五十音圖のイの段の音に添ふ。

落ち……ない(ぬ)。

下一段 打消のない又はぬが五十音圖のエの段の音に添ふ。

消え……ない(ぬ)。

二 活用の假名遣を識別する法

(イ) ア行ハ行ヤ行ワ行の識別法

ア行 射る 鑄る …………… 上一段

得る(心得る) …………… 下一段

ワ行 植ゑる 飢ゑる 据ゑる …………… 下一段

居⁺る 率ゑる …………… 上一段

ヤ行 老いる 悔いる 報いる …………… 上一段

甘える 癒える おびえる 覺える 消える

聞える 越える 肥える 凍える 冴える

榮える 聳える 絶える 費える 煮える

映える 冷える 吼える 見える 燃える

崩える 悶える …………… 下一段

右の外はすべてハ行の活用である。

(ロ) ザ行・タ行の識別法

ザ行 1 混ぜる(交ぜる)……………下一段

2 サ變動詞中の講ずる・論ずる・重んずる等のやうに語尾の濁るもの。

右の外はすべてタ行の活用である。

練習題

一次の文中から動詞を選び出し、其の活用の種類をいへ。

- (1) 智識を得たいと欲望が益強くなる。
- (2) 父が木を伐れば自分は雑草を刈る、父が鳥を打てば自分は種をまく。
- (3) 裁判の目的は決して人を争はせ又は人を罰する

ことではありません。

(4) それは珍しいものだ。すぐ連れて来い。

(5) 火を使用するのは人類ばかりで、他の動物には

見られない。

(6) 見忘れたか。覺悟しろ。

(7) 強い酒をつくれ。さうして八つの桶に入れて大蛇

の来る所に並べて置け。

二次の文中○のところの適当な假名を入れよ。

- (1) 急に天が曇つて来て、星影一つさへ見○ない。
- (2) 大砲を鑄て砲臺に据○る。
- (3) 問ふことを恥○るものは、立派な人にはなれない。
- (4) 老○ては子に従へ。
- (5) 庭園に花を植○て楽しむ。

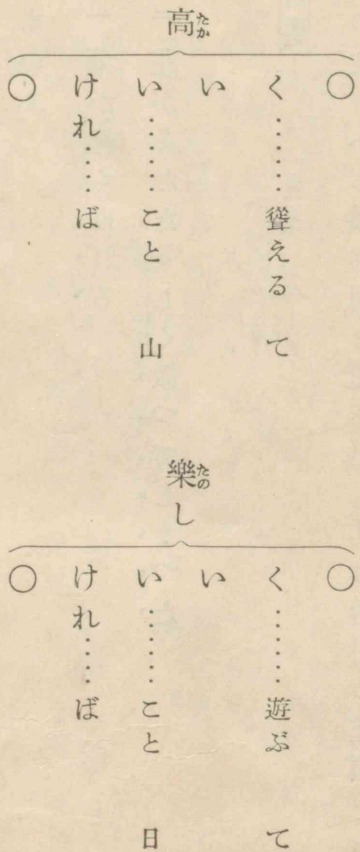
- (6) 彼の率^④行^{サ行}る一隊は敵の右側に出た。
- (7) 木枯の吼^④行^{サ行}る夜は、何ともい^〇ぬ物凄さを感^〇る。

自修題

次の文中から動詞を選び出し、其の活用の種類をいへ。

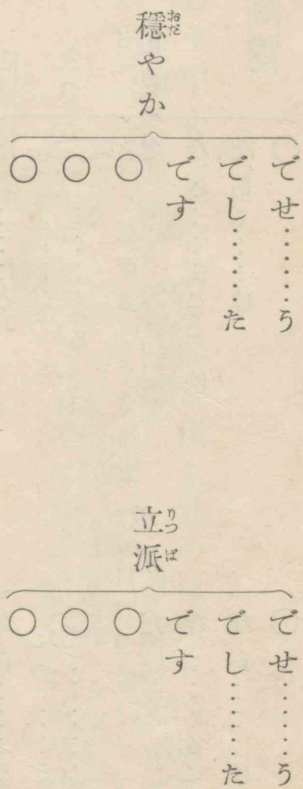
- (1) 土に少し砂をまぜて、鉢^下に入れ、勢^下のよい苗^{四段}を選び、一鉢^下に一本づつ植^下えました。
- (2) ひぐらし蟬^下の聲^サが聞^下え始めると、暑^下さがどんなにはげしくても、妙^下に秋^下らしい氣^下がする。
- (3) 坑^下外へ出ると、急^下に夜^下が明^下けたやうで、日光^下の有難^下さを感^下じる。
- (4) 昔^上の武士^上はたとひ飢^上ゑて死^上ぬことがあらうと、二君^上に仕^上へることを恥^上ぢたものです。
- (5) 王^上は間もなく健康^上を回復^上して、再び其の英姿^上を陣頭^上にあらはす事^上が出来た。

第四章 口語形容詞の活用



右の例でわかるやうに、口語形容詞の活用はたゞ一種で、五十音圖のア行・カ行に跨がつて活用し、未然形・命令形がない。

但し、樂しいのやうに、語幹にしのあるものをシク活用、高いのやうに、しのないものをク活用と呼ぶことがある。



第二種	第一種	種類
立派 <small>てす</small>	静か <small>だ</small>	語
立派 <small>てす</small>	静か <small>だ</small>	語幹/語尾
立派 <small>てす</small>	静か <small>だ</small>	未然
立派 <small>てす</small>	静か <small>だ</small>	連用
立派 <small>てす</small>	静か <small>だ</small>	終止
立派 <small>てす</small>	静か <small>だ</small>	連體
立派 <small>てす</small>	静か <small>だ</small>	假定
立派 <small>てす</small>	静か <small>だ</small>	命令

右の例のやうに、口語形容動詞は二種あるが、第二種をていねいにいふ時は語尾がてすになる。

練習題

次の文中から形容動詞を選び出し、其の活用をいへ。

- (1) 波が静かなら船を出してもよからう。
- (2) あの方の勤勉ニ種なものには驚きました。
- (3) 曆は實に重寶ニ種なものだ。
- (4) 緑草ニ種の間に羊の群をなして遊ぶ様は實にのどかである。
- (5) あそこの植付をした時はまだ寒一種かった。
- (6) 大阪は各種の工業が甚だ盛ニ種です。

- (7) 身體 さへ 丈夫なら 何でも 出来て 愉快でせう。
- (8) 病氣 は 意外に 軽かつたので、幸でした。

自修題

次の文中から形容動詞を選び出し、其の活用をいへ。

- (1) 家族の人は彼が何時寝たかも知らない事が多かつた。
- (2) 「事實はかうだつたのです。よく聞いて下さい。」さうですか、それなら結構ですがね。
- (3) 勝負の様子はどうか。猛烈なものださうだね。
- (4) 朝が来た。ほがらかなさわやかな朝が来た。軒ぼでは、子雀の晴れやかなものがたり。
- (5) チューリップもきれいだが、すみれもきれいだらう。

第六章 口語用言の音便

一 動詞の音便

或語が他の語に続く場合、發音の便宜上その音が變化することがある。これを音便といふ。口語動詞の音便は、サ行を除く四段活用の連用形に、助動詞のた、助詞のて、たりに続く場合に起り、次の四種ある。

イ音便 きぎがい に轉ずる場合

咲いた 泳いだ
 咲いて 泳いで
 咲いたり 泳いだり

行きだけは、行つた行つて行つたりのやうに、次に説く所の促音便となる。

ウ音便

ウ音便 ひがうに轉ずる場合

買うた

買ひ 買うて

買うたり

撥音便

撥音便 にびみ^が撥音のんに轉ずる場合

飛んだ

死に 死んで

死んだり

飛び

飛んで 飛んだり

踏み

踏んで 踏んだり

促音便

促音便 ちひりが促音のつに轉ずる場合

勝った

勝ち 勝つて

勝つたり

買ひ

買つて 買つたり

賣り

賣つて 賣つたり

ぎにびみが音便になる時は、次に來るたてたりはだでだりとなる。

二 形容詞の音便

ウ音便 口語形容詞の連用形に、ございます存じますが續く

時、語尾のくがうとなる。

有難く………有難うございます。

うれしく………うれしう存じます。

練習題

一次の文中の音便を示し、其の種類をいへ。

- (1) 騎兵が土を促音便けて走るのを見撥音便ました。
- (2) 朝に星を載イ音便いて出で、夕に月を撥音便踏んで歸る。

- (3) 風に向かうて進んだ。
ウ音便
- (4) 私の病氣はごくかるうございました。
ウ音便
- (5) そのお金が無い時には、川へ飛込んで死んでしまふつもりでした。
撥音便
- (6) 海賊どもは船を漕いで歸つて行つた。
イ音便 促音便
- (7) 山が路の前面に突立つて人の行手をさへぎつた。
促音便
- (8) ようございます、まけて置きます。
促音便
- (9) お祭にお招き下さいましてありがたう存じます。
促音便
- (10) たくさんの魚が、池のふちに沿うて、みんな同じ方向に泳いでゐます。
イ音便

二次の文の誤を正し、其の理由をいへ。

- (1) 此の道に沿ふて行けば海岸に出る。
- (2) 風呂敷包を背負つた背中が汗ばむで来る。
- (3) 一寸新聞を讀むでから行きます。
- (4) お見送りを辱ふし有りがたう御座いました。

自修題

次の文中の音便を示し、其の種類をいへ。

- (1) 日はもう西に傾いてゐる。ふと見あげると庭の柿の木にはすゞなりになつた實が夕日をあびて、珊瑚珠のやうにかゞやいてゐる。
イ音便 撥音便
- (2) 飛んで火に入る夏の蟲。
イ音便
- (3) 此の上は聖賢を訪うて教を受けるより外はない。
イ音便 促音便
- (4) 彼は名高い學者を尋ね廻つて説を聞いた。
イ音便
- (5) 久し振りにお會ひして、誠にうれしう存じます。
イ音便

受身の助動詞

一 受身の助動詞 れる・られる

主人に叱ら：れる。
主人に譽め：られる。

語/活用		未然	連用	終止	連體	假定	命令
れる	れる	れ	れ	れる	れる	れれ	れよ
られる	られる	られ	られ	られる	られる	られれ	られよ

可能の助動詞

二 可能の助動詞 れる・られる

誰でも行か：れる。
誰にでも覚え：られる。

活用は受身の場合と同じである。但し、命令形はない。

自發の助動詞

右の例のやうに、可能の助動詞は、また動作が自然に起る意味にも用ひられる。之を特に自發の助動詞ともいふ。

使役の助動詞

三 使役の助動詞 せる・させる

妹に字を書か：せる。
弟に悪戯をやめ：させる。

語/活用		未然	連用	終止	連體	假定	命令
せる	せる	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ
させる	させる	させ	させ	させる	させる	させれ	させよ

崇敬の助動詞

四 崇敬の助動詞 れる・られる・ます

兄上が種を蒔か：れる。
 父上が木を植ゑ：られる。
 草取は私がし：ます。

語	活用
ます	未然
ませ	連用
まし	終止
ます	連體
ますれ	假定
まし	命令

れる・られるの活用は、可能の場合と同じである。

右の外、あそばす・なさる・いたす・まうす・下さる・給へ・上げる等の動詞が使はれる。この場合は崇敬の助動詞である。

五 打消の助動詞 ぬ(ん)・ない・まい

私は知ら：ぬ。(ん)

…ない。

打消の助動詞

あの子も知る：まい。

語	活用
ぬ	未然
ず	連用
ぬ(ん)	終止
ぬ(ん)	連體
ね	假定
	命令

まいは打消の推量の意をあらはす外に、決意をもあらはす。
 もう決してあの家には行く：まい。
 なくはあると合してなから(う)なかつ(た)となる。

六 時の助動詞

(イ) 未來の助動詞 う・よう

明日は雨が降ら：う。

時の助動詞
 未
 來

明日は晴れ：よう。

語	活用	未然	連用	終止	連體	假定	命令
よう				よう	(よう)		
う				う	(う)		

過 去

(ロ) 過去の助動詞 た(だ)

昨日朝早く起き：た。

た(だ)を連用形に入れる人もあるが、今は助動詞としてあつかふ。

語	活用	未然	連用	終止	連體	假定	命令
た		たら		た	た	たら	

たはだとなることがある。

道を急い：だ。

高く飛ん：だ。

願望の助動詞

七 願望の助動詞 たい・たがる

たは完了又は現在の様子をいふ意味にも使はれる。

授業はたつた今終つ：た。

帽子をかぶつ：た：學生がゐる。

首尾よく及第し：たい。

家へ歸り：たがる。

語	活用	未然	連用	終止	連體	假定	命令
たい			たく	たい	たい	たけれ	
たがる		たがら	たがり	たがる	たがる	たがれ	

たくはあると合して、たから(う)たかつ(た)となる。

推量の助動詞

八 推量の助動詞 らしい・さうだ・さうです

あの人にはもう知つてゐる：らしい。

語	活用
らしい	未然
	連用
らしく	終止
らしい	連體
らしい	假定
	命令

らしくはあると合してらしくかつ(た)となる。

右の外、さうだ・さうです及び後に説く比況の助動詞やうだ・やうですが使はれる。

雨が降り：さうだ。

何か有り：さうです。

語	活用
さうだ	未然
さうだ	連用
さうだ	終止
さうだ	連體
さうだ	假定
	命令

指定の助動詞

九 指定の助動詞 だ・です

昨日來たのはあの人：だ。
これは私の本：です。

語	活用
だ	未然
だ	連用
だ	終止
だ	連體
だ	假定
	命令

比況の助動詞

一〇 比況の助動詞 やうだ・やうです

やうであるをいれる
 又もあるがこゝでけ
 (やう)とあるを分
 ける。

落花が雪の：やうだ。
 海は静かで、疊を敷いた：やうです。

活用	語	
	やうだ	やうです
未然	やうだら	やうでせ
連用	やうだつ やうで やうに	やうでし やうです
終止	やうだ	
連體	やうな	
假定	やうなら	
命令		

練習題

次の文中から助動詞を選び出し、其の種類及び活用をいへ。

- (1) 此の分ならば五海里や十海里は何でもない。
- (2) 老人はあまり疲れないやうであつた。
- (3) もう人にははたよるまい。自分一人で修行しよう。

- (4) どうぞこの願をお聞きとゞけ下さいませ。
- (5) 陸地發見がそれ程の手がらだつたでせうか。
- (6) 此の世の別れに一曲だけ吹かせてもらひます。
- (7) 來客があるらしいから、行くのをやめにしよう。
- (8) 白かうすい色の花が咲くのなさうです。
- (9) 電氣は今や各方面に利用せられてゐる。
- (10) 道をお急ぎなさい。
- (11) 私はこゝへ來たかつたのです。
- (12) 私も日本男子です。何で命を惜しみませう。
 どうぞこれをごらん下さい。

自修題

次の文中から助動詞を選び出し、其の種類及び活用をいへ。

- (1) 兵營は軍人精神を養ふ所なのです。
- (2) リンカーンが他日大統領になり世界の偉人として萬人に仰がれるやうになつたのは、その少年時代の苦心のたまものである。
- (3) これだけお待ちあそばせば、もうよろしう御座いませう。
- (4) ハイビスカスが、家々の垣根といはず、公園といはず、咲いてゐるのを見ると、まるでお伽の國でも、さまよつてゐるやうな氣がする。
- (5) 若し國語の力によらなかつたら、我々の心は、どんなにばら／＼になることであらう。
- (6) 田圃に早稲の穂が出揃つて、白く波打つのが、秋らしく見渡される。

第八章 口語助動詞の接續

他の品詞と助動詞との接續

一 受身(可能・崇敬)の助動詞

受身(可能・崇敬)の助動詞

れる……四段の動詞の未然形

られる：右以外の未然形

れるが四段に添うて「讀まれる」「書かれる」「行かれる」などといふべきを、約して「讀める」「書ける」「行ける」などといふやうに使はれるこ

兄に叱られる。
 私にも讀まれる。
 父上が行かれる。
 兄は譽められる。
 子供にでもせられる。
 叔父上は明日來られる。

とが多い。此の場合は一語の動詞である。
られるがサ變に添うて「せられる」「發明せられる」「全うせられる」などといふべきを、約して、「される」「發明される」「全うされる」などといふ事が多いが、これ等は一語と見ず、元の形に返して動詞と助動詞とに分解するがよい。

可能の助動詞
使役の助動詞

二 可能の助動詞 前項参照
三 使役の助動詞

せる……四段の動詞の未然形
よく齒を磨かせる。
させる……右以外の未然形
何度も試みさせる。

させるがサ變に添うて「掃除せさせる」「全うせさせる」などといふべきを、約して「掃除させる」「全うさせる」などといふ事が多いが、これ等も元の形に返して動詞と助動詞とに分解するがよい。

崇敬の助動詞

四 崇敬の助動詞

ます……全動詞の連用形

澤山有り、ます。

れるられるは受身の場合と同じである。

右の外動詞から來たものはすべて連用形に添ふ。

打消の助動詞

五 打消の助動詞

ぬ……全動詞の未然形(但し有るには添はない)

そんなに早くは出來ぬ。

ない……同前

友人がなか／＼來ない。

まい……四段の動詞の終止形

もう泣くまい。

右以外の未然形

まだ實が落ちまい。

サ變に添ふ時には「せぬ」「しなぬ」「しまぬ」となる。

時の助動詞

六 時の助動詞

う……………四段の動詞の未然形

形容動詞の未然形

やがて雪が降らう。
明日は寒からう。

よう……………右以外の未然形

やがて日が暮れよう。

た……………全動詞の連用形

日が暮れた。

形容動詞の連用形

愉快だつた。

だ……………四段の動詞の連用形（中略）ぎにの中略びみの中略が音便になる時

漕いだ。（漕ぎた）

死んだ。（死にた）

叫んだ。（叫びた）

讀んだ。（讀みた）

願望の助動詞

七 願望の助動詞

たい……………全動詞の連用形

あくまで強く生きたい。

推量の助動詞

八 推量の助動詞

たがる……………同

大へん来たがる。

らしい……………全動詞の終止形

形容詞の終止形

やがて潮が引くらしい。
餘程苦しいらしい。

體言

あれは僕の弟らしい。

さうだ……………全動詞の連用形

花が散りさうだ。

形容詞の終止形

日が延びるさうだ。

形容詞の終止形

随分寒いさうです。

形容動詞の終止形

冬でも暖かさうです。

指定の助動詞

九 指定の助動詞

だ……………全動詞の連體形

夜が明けらう。

形容詞の連體形

随分高いだらう。

體言

助詞

です……同前

彼は秀才だ。
明日は行くのだ。
もう死ぬてせう。
随分高いてせう。
彼は秀才です。
一番白いのです。

比況の助動詞

一〇 比況の助動詞

やうです 全動詞の連體形

形容詞の連體形(推量)

助詞

遠雷の轟くやうだ。
外は暗いやうです。
雪のやうだ。

助動詞相互の接續

口語助動詞相互の接續は用言との接續に準じて知ることが出

来る。

人を選んで行かせられたい。

手紙は多分母が出したでせう。

あの方は知らないらしいのです。

練習題

一次の文中から助動詞を選び出し、其の種類接續を説明せよ。

- (1) ちとお遊びにいらつしやいませ。
- (2) 修行を思ひ止らせようとした。
- (3) 行かうと思へば何時でも行かれる。
- (4) 昨日は仕合をなさつたさうですね。
- (5) 先生がさういはれました。

- (6) もつと勉強しなればなりません。
 - (7) 何か仕事を お命じ下さい。
 - (8) 一體こゝが どうして外國かと思ひたくなる。
 - (9) 路を尋ねたいと思つたら、農夫にお聞きなさい。
 - (10) 書物を持つてゐる人の所には、遠近をとはず借りに行つた。
 - (11) もはや調べさせる必要はないらしい。
 - (12) お名前を承りたうございます。
 - (13) どんなによく整頓されてゐるかが想像されます。
 - (14) 卵が卓上に立たうはずはないだらう。
- 二次の文中の誤を正し、其の理由をいへ。
- (1) そんなことは恐らく言ひまい。

- (2) 明日は私も行こうと思つてゐます。
- (3) とてもだめだらうが、もう一度やつてみやう。
- (4) そんな亂暴なことはするまいと思ふがどうでしょう。
- (5) 光陰は矢のようです。

自修題

次の文の誤を正し、其の理由をいへ。

- (1) 使命を全うして歸るでしよう。
- (2) 死のうが生きやうが、それは問題でない。
- (3) 私の思ふように改めささうとしても、なか／＼承知しますまい。
- (4) 朝早く起きやうと思へば、起きられないことはなかるう。

第一類

助詞は次のやうに、大體三種類にわかれる。

一 第一類 主として體言に添ふもの。

が 鳥が鳴きます。 あれが弟です。

の 櫻の花。 私の讀む番です。

に 机の上におく。 あの方に話しました。

へ 東京へ行く。 こちらへ来る。

を 字を書く。 あなたを待つ

と 筆と紙とほしい。 私と行きます。

より 海より深い。 あなたより高い。

から 家から出る。 これからどうする。

第二類

二 第二類 主として活用語に添ふもの。

まで 大阪まで行く。 こゝまで来た。

で ペンで書け。 あそこで休みませう。

ば 雨が降れば行くまい。 面白ければ見に行かう。

見なければ見ませう。

ので 風が吹くので花が散る。 寒いので困ります。

聞かないので存じません。

から 投げるから受けよ。 をかしいから笑ひました。

聞きましたからお知らせします。

ても 遊びに来ててもだめだ。 悲しくても泣きません。

問はれても答へない。

けれど(も) 大聲で呼ぶけれど(も)聞えないと見える。

風が強いけれど(も)船はゆれない。

買ひたいけれど(も)金がない。

が とめるがやめない。 頭はよいが身體が悪い。

のに 勉強するのに成績がわるい。 安いのに買はない。

努力したのにかひがなかつた。

し 鳥も鳴くし花も咲く。 朝も早いし夜もおそい。

英語も出來ますし數學も出來ます。

て 試験を受けてみよう。 うれしくてたまらない。

叱られて恥づかしかつた。

たり 行つたり來たりする。 寒かつたり暑かつたりだ。

讀ませられたり書かせられたりしました。

ながら 涙を流しながら語られました。

苦しいながらもこらへてゐた。

こゝとをいはれながらも手傳ひました。

三 第三類 いろ／＼の語に添ふもの。

は 櫻は我が國花である。 これは私のはありません。

も 野も山も花盛だ。 家へも歸らない。

さううれしくもない。

こそ 雪こそ降らぬが寒い。

ようこそお出で下さいました。

それでこそ我が子だ。

さへ 風が吹くのに雨さへ降る。 話しさへすればわかる。

死んでしまはうとさへ思ひました。

でも 茶でも水でも飲みたい。何處へでもお伴しませう。

崖から落ちてもすると大變だ。

ばかり 本ばかり読んでゐる。少しばかり下さい。

遊んでばかりゐる。

だけ 生徒だけ行きました。一寸見るだけならよい。

のぞいただけです。

しか 五十錢しか持ちません。僅かしか残つてゐない。

ほか 寝るよりほか仕方がない。

ぎり これぎりだよ。私と弟ぎりです。

行つたぎり歸らない。

ぐらゐる 小学校ぐらゐは出ただらう。十米ぐらゐはあらう。

こぼれるぐらゐ注いでくれました。

やら 花やら雪やらわからぬ。誰やらがいつた。

泣くやら叫ぶやら大騒ぎでした。

か これは何の本か。誰かゐませう。

ペンか鉛筆かを貸して下さい。

そんなことがあるものか。

桃や櫻が一時に咲く。花子やお出で。

もう二度と来るな。

わしは行かないからな。中々面白いな。(なあ)

風よ吹け。母も行つたことがあるよ。

それはさうだらうよ。

誰ぞ来るだらう。さあ始つたぞ。

ねえ 随分久し振りだね。(ねえ) あれはね私の弟です。

練習題

一次の文中から助詞を選び出せ。

- (1) 水の中は冷たいけれども、上るとなほ寒い。
- (2) 泣いても笑つても、もはや仕方がない。
- (3) 随分勉強したのに合格出来なかつた。
- (4) 九時には消燈ですからその前に日記をつけたり手紙を書いたりします。
- (5) 老人はちらと見たきり何とも言はない。
- (6) なるほど君らの仲間はずるぶん多いな。かぞへてみるから向かふの陸まで並んで見たまへ。
- (7) あゝよく歸つて来たね。

二次の文中〇のところの適当な語を補へ。

- (1) 行末のことを思へば〇〇やかましくいつたのです。
- (2) 先づ讀むこと〇〇出来ればよるしい。
- (3) その位のことには誰に〇〇出来ませう。
- (4) いたづらする〇〇叱られるのだ。
- (5) これから東京〇行きます。

自修題

次の文中から助詞を選び出せ。

- (1) 花も咲かず、鳥も鳴かないけれど、春がしのびよつてゐる。
- (2) むすこさんはなくなられるし、孫さんは小さいし、不幸つゞきでございますね。
- (3) う忍死をするやうなことがあつても、あなたから金をもらはうとは思ひません。
- (4) 反抗するばかりでなく、迫害を加へようとするものさへ出て来た。

接頭語

第十章 口語の接頭語・接尾語

一 接頭語

單獨には使はれないで、他の語の上について熟語となる語を接頭語といふ。

う	ひ	陣	は	つ	雪	お	庭	御	用	心	す	足	
まつ	白	ま	心	不	成	功	ほ	の	暗	い	か	弱	い
け	高	い	な	ま	や	さ	し	い	も	の	寂	し	い
											た	易	い

又

う	ち	明	け	る	さ	し	出	す	ひ	き	受	け	る	ぶ	つ	倒	す
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

右のうちさしひきぶつ等は本來動詞であるが、その本の意を失つて接頭語となつたものである。

接尾語

二 接尾語

單獨には使はれないで、他の語の下について熟語となる語を接尾語といふ。

子	ど	も	お	父	さ	ん	こ	れ	ら	君	た	ち	君	が	た
長	さ	眠	け	嬉	し	さ	細	め	厚	み	寒	け			
春	め	く	黄	ば	む	嬉	し	が	る	上	品	ぶ	る		
春	ら	し	い	議	論	が	ま	し	い	夜	す	が	ら		

練習題

次の文中から接頭語・接尾語を選び出せ。

- (1) どれ、私も お茶の 御馳走 になりませう。
- (2) 釋迦は 夜すがら 靜坐して 思をこらしてゐた。
- (3) 打出の小槌の やうなものは、誰一人 ほしがらない

- (4) ものはありません。た易く出来る。仕事でないから、君たちもしつかりしたまへ。
- (5) こゝ二箇月は雨らしい。雨は降りません。
- (6) 午後になるとうすら寒くなります。
- (7) 北の國はまだま冬である。
- (8) 此の金を半分さし上げたいうございます。

自修題

次の文を品詞に分けよ。

- (1) おゝ、よく来たね。もつといろ／＼な物を買つて歸ればよかつたのだが、どうもいそがしくてね。
- (2) 京鎌倉では、そろ／＼櫻の咲かうといふ三月の初であるのに、北風の荒い北海の孤島ではちら／＼雪が降る。

第三篇 文章篇

第一章 文の成分

一 主語述語

- 一 犬が走る。
- 二 花が美しい。
- 三 正成は忠臣だ。
- 四 私も行きましたよ。

右の文に於て、犬が花が正成は私もは其の文の主體をなす語であるから、これを主語といひ、走る美しい忠臣だ行きましたよは主語についてその動作状態性質等を述べる語であるから、これ

主語
述語

を述語といふ。

主語は普通體言から成り、助詞がはも等を伴なふ。

但し、又次の例のやうに、體言に準ずる語から成ることもある。

一 行くのが よろしい。

二 白いのは きれいです。

三 賑やかなのも すきです。

述語は普通用言又は用言に助動詞、助詞の添うたものから成る。

但し、又次の例のやうに、體言又は體言に準ずる語に助動詞又は

助詞の添うたものから成ることもある。

一 富士は 日本の名山です。

二 それは 本か。

三 あなたも 歩くのですか。

補語

主語、述語は文の主成分であつて、普通これが備らねば完全な文とはいへない。

二 補語

一 猫が 鼠を 捕へる。

二 父は 東京に 行かれました。

三 頼朝が 幕府を 鎌倉に 開いた。

四 明治天皇は 江戸城を 皇居と お定めになつた。

右の例に於て、傍線を施した語は、各、其の述語の目的をあらはし、又は述語の意味を助けて其の働を完全にする。かやうな語を

補語といふ。

補語は體言又は體言に準ずる語から成り、必ず助詞をにと等を伴なふ。

修飾語

補語は、述語の性質によつて必ず無ければならぬ場合と無くてもよい場合とある。

三 修飾語

一 美しい鳥が ほがらかに啼く。

二 秀吉は 大きな城を 交通の便利な大阪に 築いた。

三 山のやうな波が 切立つた岩に ものすごく砕ける。

右の例に於て、傍線を施した語は、各主語・述語又は補語を修飾してゐる語である。かやうな語を修飾語といふ。

修飾語の中には、體言を修飾するものと、用言を修飾するものがある。

體言の修飾語は、形容詞又は形容詞に準ずるものから成る。

廣い野原をさまよふ。

讀める本がない。

知らない人が多い。

庭の梅が咲きました。

用言の修飾語は、副詞又は副詞に準ずるものから成る。

春風がそよ／＼と吹く。

空は青くすみきつてゐます。

年月は夢の間に過ぎてゆきます。

四 獨立語

一 おとうさん、これは何ですか。

二 おや、誰も居ないぞ。

三 春は來た。しかしまだ寒い。

右の例に於て、傍線を施した語は、主語・述語・補語又は修飾語の何

獨立語

れにも屬せぬものである。かやうな語を獨立語といふ。

練習題

次の文の主語・述語・補語・修飾語・獨立語を示し、修飾語は其の修飾する語をいへ。

- (1) 鏡のやうな月が、森の上に、美しい姿を現した。
- (2) おや、北斗七星が、半分杉林にかくれた。
- (3) ところ／＼に梅が咲き、麥の緑があざやかに広がる。
- (4) 生徒は蜘蛛の子を散らしたやうに散つた。
- (5) 日本、日本、お前は希望にかゞやいてゐる。
- (6) 二三日のコスモスが、夕やみに、かすかに浮いて見える。
- (7) たまに散る落葉の音が、がさり／＼と聞える。

- (8) 汽車は、幾度か鐵橋を渡り、短いトンネルを過ぎた。

自修題

次の文の主語・述語・補語・修飾語・獨立語を示し、修飾語は其の修飾する語をいへ。

- (1) あゝ、私も五海里の海上を泳ぎきることが出来たのです。
- (2) あなたはもつとおしまひの方をあけて下さい。
- (3) 曆は私たちに日々の事を教へてくれます。
- (4) 諸君、電氣は今やかくの如くあらゆる方面に利用されてゐます。けれども、其の利用は決してこれで盡きたものではありません。

第二章 文の成分の位置及び省略

正
常

一 正常の場合

一 美しい花が はら／＼と散る。

二 數臺の飛行機が 青い空を 悠々と飛ぶ。

右の例で明らかかなやうに、文の成分の正常な位置は次の通りである。

一(修飾語)主語……(修飾語)述語。

二(修飾語)主語……(修飾語)補語……(修飾語)述語。

但し次のやうなのは、修飾語がその下全體を修飾してゐるのである。

一 全く私は残念に思ひます。

倒
置

二 倒置の場合

二 僕も思はず萬歳と叫んだ。

一 私の机の上に ペンが ある筈だ。

二 お上手ですね、あなたは。

二 何を 君は してゐるのですか。

四 待つて下さい、ほんの暫く。

右は語調を整へ、又は語勢を強める爲に、文の成分の位置を變へたものである。

三 省略の場合

(イ) 主語の省略

一(私は)明日お訪ねします。

二(みなさんは)そんなことをしてはいけません。

省
略

(ロ) 述語の省略

- 一 あなたは、どちらへ。(いらつしやいますか)
- 二 私は行きます。あなたは。(行きますか)

(ハ) 補語の省略

- 一 これを(あなたに)差上げませう。
 - 二 皆その本を買ひましたから、私も(その本を)買ひました。
- 右の例のやうに、文は簡単にしたたり、意味を強めたりする爲に、其の成分を省略することがある。

練習題

次の文中省略されたものは補ひ、倒置されたものは正常の位置におけ。

- (1) おゝ、五作さんか。暑いことですね。
- (2) まあ、中へはいつてゆつくり見て下さい。
- (3) 誰だ、仕事臺の上をかき廻したのは。
- (4) ゆふべ不思議な夢を見ました。
- (5) 人は火を用ひる動物。
- (6) 三人は「どうかもう一曲」としきりに頼んだ。
- (7) 着物を着る、風を引くから。
- (8) 先生がどうしてこちらへ。
- (9) 全領土を二分して興へてやつた二人の娘が、揃ひも揃つてこれ程の不孝者であらうとは。
- (10) これを御覧になつたら、姉上もお氣の毒とお思ひになりさうなものだのに、——まあ、此の體であのひどい嵐の中を——。

自修題

次の文中省略されたものは補ひ、倒置されたものは正常の位置におけ。

- (1) 今日始めてつばめを見たよ。
- (2) 物好きだなあ。名所見物に雨がいゝといふのは。
- (3) あちらでもこちらでも、驚く聲、感心する聲、嬉しさうな聲。
- (4) 私もきつと来ますよ、夏休になりましたらね。
- (5) ではお別れですね。いろ／＼お世話になりました。
- (6) 願はくは、我に七難八苦を與へ給へ。
- (7) どんな本が読みたいのですか。
- (8) 東京から大阪へ飛行機で——かう考へるだけでも實に愉快だ。

自修題補遺

一 次の文を單語にわけてその品詞名をいへ。

- (1) 四月といへば、春はもうなかばである。月の初はまだ寒くて、冷たい雨の降りしきることもあるが、其の間にも、柳の芽の緑が日ましに太り、畠や道端の若芽が目に見えてのびて来る。
- (2) 待たれるものは櫻である。早い年には、三月の末か四月のごく初に蕾のほころびることがある。さういふ年には、季節はづれの雪が降つたりして、せつかくの花をだいなしにする。
- (3) 空飛ぶ鳥を見て、自分もあゝいふ風に飛んでみたいと思ひ、いろいろ工夫をこらした人は、かなり古くからあつたやうです。我が國

でも、今から百數十年前、岡山の幸吉といふ表具師が、鳩の體を研究して大きな翼をこしらへ、それをあやつりながら屋根から飛んで、人々を驚かしたといふ話があります。

(4) ほう、お前が世話をしようといふのか。よからう。一つやつてごらん。細かい事はだんくんに話してあげようが、第一は、馬をよくかはいがつてやることだ。日本の馬は氣が荒いとかいはれるさうだが、それも馬が悪いのではない、扱ふ人がいけないから、馬に悪いくせが附いてしまふのだ。親切にしてやれば、馬程すなほで利口なもののはめつたにないぞ。

(5) 「ブッボウソウ」と鳴く鳥のことは、千年の昔から、我が國の詩や歌にうたはれてゐますが、其の聲の主がどんな鳥であるかは、最近まで、はつきりわかりませんでした。

二 次の文中活用語を選び出し、其の活用をいへ。

- (1) やれ打つなはへが手をする足をする。
- (2) 昭和七年の夏、こゝで開かれたオリンピック大會に、日本選手が、めざましい活躍をしたことは、今も町の嬉しい話題になつてゐます。皆さんは、アメリカ合衆國に、沙漠があらうなどとは思はなかつたでせう。
- (4) 川岸に沿うてぎつしりと並ぶ埠頭は、すべてで一千以上に及ぶさうです。
- (5) 川端の石に腰かけて、來し方行末を思ひながら、鹿介はじつと水の面を眺めた。

三 次の文の主語・述語・補語・修飾語・獨立語をいへ。

- (1) いたる所水田がよく開けて、稻が青々とのびてゐる。

- (2) ひよるひよるとのびたポブラの下の一軒家、垣根にかけた白い干し物、赤い土の色などを見ると、なるほど朝鮮だなどいふ感じがする。
- (3) 子馬の生まれたのは、去年の春、ちやうど櫻の花の咲く頃でした。
- (4) 粉雪が幾日も降續いて、野も山も眞白に埋めつくしてしまつた。
- (5) さて、此の度の舞は日本一の出来であつた。
- (6) 甚七郎、此の宵は祖先傳來の寶、これをお前にゆづる。
- (7) あゝ、それなら、天文学といふ見出しのある所を見るのです。
- (8) 夜の燈をしたつて來る蟲は、蛾や、こがね蟲や、羽蟻が多く、どれもこれも、たゞうるさいだけである。

女子新國文典 初年級用終

下
ガサガ
投げる 載せる 混ぜる
まのな
ぜせげ
ぜせげ
げる せる ぜる
げる せる ぜる
げれ せれ ぜれ
げよる せよる ぜよる

第一表

口語動詞活用表

種類	段 四	段 一 上	段 一 下
行	ラ マ バ ハ ナ タ サ ガ カ	ワ ラ ヤ マ バ ハ ナ ダ タ ガ カ ア	ラ ヤ マ バ ハ ナ ダ タ ザ サ ガ カ ア
語	降 讀 飛 買 死 打 押 漕 書 る む ぶ ぶ ぬ つ すぐ く	居 懲 老 見 延 干 似 閉 落 過 著 射 る る る る る る る る る る る る る	得 受 投 載 混 捨 撫 兼 堪 述 譽 消 枯 ける ける げる せる ぜる てる せる げる ける える
語幹/語尾	ふよとかしうおこか	(あ)こ(お)み(ひ)に(と)おす(き)い	かきほのたかなすまのなう(え)
未然	らまばはなたさがか	ありいみびひにぢちぎきい	れえめべへねでてせせげけえ
連用	りみびひにちしぎき	ありいみびひにぢちぎきい	れえめべへねでてせせげけえ
終止	るむぶぶぬつすぐく	るるるるるるるるるるるるるるるる	れるるるるるるるるるるるるるるるる
連體	るむぶぶぬつすぐく	るるるるるるるるるるるるるるるる	れるるるるるるるるるるるるるるるる
假定	れめべへねてせげけ	ありいみびひにぢちぎきい	れえめべへねでてせせげけえ
命令	れめべへねてせげけ	るるるるるるるるるるるるるるるる	れえめべへねでてせせげけえ

第二表

口語動詞活用別表

カ 變	サ 變	四 段	上 一 段	下 一 段
くる(來)	する(爲) 他語にするがついたもの	打消のない又はぬが五十音圖のアの段の音につく	打消のない又はぬが五十音圖のイの段の音につく	打消のない又はぬが五十音圖のエの段の音につく

口語假名遣別表

ア 行	ワ 行	ヤ 行	ハ 行	ザ 行	ダ 行
射る 鑄る 得る 居る 率ゐる 植ゑる 飢ゑる 据ゑる 老いる 悔いる 報いる 其の他終止形が文語になほしてゆとなるもの 甘える 癒える おびえる 感じる 消える 聞える 越える 肥える 凍える 冴える 榮える 聳える 絶える 覺える 煮える 生える 映える 冷える 殖える 吼える 見える 燃える 萌える 悶える	射る 鑄る 得る 居る 率ゐる 植ゑる 飢ゑる 据ゑる 老いる 悔いる 報いる 其の他終止形が文語になほしてゆとなるもの 甘える 癒える おびえる 感じる 消える 聞える 越える 肥える 凍える 冴える 榮える 聳える 絶える 覺える 煮える 生える 映える 冷える 殖える 吼える 見える 燃える 萌える 悶える	射る 鑄る 得る 居る 率ゐる 植ゑる 飢ゑる 据ゑる 老いる 悔いる 報いる 其の他終止形が文語になほしてゆとなるもの 甘える 癒える おびえる 感じる 消える 聞える 越える 肥える 凍える 冴える 榮える 聳える 絶える 覺える 煮える 生える 映える 冷える 殖える 吼える 見える 燃える 萌える 悶える	右の外	混ぜる(交ぜる) サ變の語尾の濁るもの 講ずる 論ずる 重んずる等	右の外
上 一 段	上 一 段	上 一 段		下 一 段	

表便音言用語口

第三表

促音便	撥音便	ウ音便	イ音便	種類
りひち <small>(き)</small>	みびに	ひ く	ぎ き	動
賣 買 勝 <small>(行)</small> つ っ っ っ て て て て	踏 飛 死 ん ん ん だ だ だ	問 う て	泳 咲 い い で て	て <small>(で)</small>
賣 買 勝 <small>(行)</small> つ っ っ っ たり たり たり	踏 飛 死 ん ん ん だ だ だ	問 う た	泳 咲 い い だ だ	た <small>(だり)</small>
賣 買 勝 <small>(行)</small> つ っ っ っ た た た た	踏 飛 死 ん ん ん で で で	問 う た	泳 咲 い い だ た	た <small>(だ)</small>
		有難う 嬉しう 存じます		形 容 詞 ごさいます・存じます

第四表
口語助動詞の種類・活用及び接續表

況比	定指	量推	望願	時		消打	敬崇	役使	能可	身受	種類						
				去過	來未												
やうてす	やうだ	さうてす	さうだ	らしい	たが	たい	た	よう	まなぬ	ま	られ	せ	られ	れ	られ	る	種類語
やうでせ	やうだら	さうでせ	さうだら		たが	ら	たら		ま	られ	せ	せ	られ	れ	られ	る	未然
やうでし	やうだつ	さうでし	さうだつ	らしく	たが	く	た		な	ず	ま	られ	せ	せ	られ	れ	連用
やうです	やうだ	さうです	さうだ	らしい	たが	たい	た	よう	ま	ぬ(ん)	ま	られ	せ	せ	られ	る	終止
	やうな		さうな	らしい	たが	たい	た	(よ)	な	ぬ(ん)	ま	られ	せ	せ	られ	る	連體
	やうなら		さうなら		たが	た	たら		な	ね	ま	られ	せ	せ	られ	れ	假定
									ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま	命令
連體・助詞(の)	體言・助詞・連體	連體・連用	終止・體言	連用	連用	連用	連用	未然(右以外)	連用	右同	右同	右同	右同	未然(右以外)	未然(四段)	接續	

文部省檢定濟

昭和二十一年十一月二日 高等女子學校國語科

昭和十二年五月十二日印刷
昭和十二年五月十四日發行
昭和十二年十月十三日訂正再版印刷
昭和十二年十月十八日訂正再版發行

【女子新國文典 初年級用】

定價金四拾五錢



著者

作者

者

者

者

者

者

者

者

者

發行者

兼

者

者

者

者

者

者

者

者

廣島高等師範學校附屬中學校
大阪市西區立賣堀南通三丁目二十一番地

國語漢文研究會

京極喜太郎

發行所

東京市赤坂區新坂町六十八番地
大阪市西區立賣堀南通三丁目
振替口座大阪八六〇四五番

京極書店

發賣所

大阪市東區北久太郎町四丁目

柳原書店

支那の歴史

昭和十二年十一月二日 東京出版

第一章	支那の歴史	一
第二章	支那の地理	一
第三章	支那の政治	一
第四章	支那の経済	一
第五章	支那の文化	一
第六章	支那の宗教	一
第七章	支那の民族	一
第八章	支那の言語	一
第九章	支那の美術	一
第十章	支那の音楽	一
第十一章	支那の演劇	一
第十二章	支那の文学	一
第十三章	支那の史学	一
第十四章	支那の哲学	一
第十五章	支那の科学	一
第十六章	支那の医学	一
第十七章	支那の法律	一
第十八章	支那の教育	一
第十九章	支那の社会	一
第二十章	支那の外交	一
第二十一章	支那の国防	一
第二十二章	支那の未来	一

支那の歴史 東京出版

支那の歴史



山
海
亭

広島大学図書
2000022308
